

# 京都 だより

Kyoto Dayori

## 【特集】 京都の名工

---

- 2013年 8月号 第1回 「瓦葺師」
- 2013年10月号 第2回 「左官」
- 2013年12月号 第3回 「竹」
- 2014年 2月号 第4回 「茅葺」
- 2014年 4月号 第5回 「鍔金物」
- 2014年 6月号 第6回 「畳」
- 2014年 8月号 第7回 「表具」
- 2017年 12月号 第8回 「彩色」
- 2015年 4月号 第9回 「あかり」



KYOTO SOCIETY OF ARCHITECTS & BUILDING ENGINEERS

一般社団法人 京都府建築士会

<https://www.kyotofu-kenchikushikai.jp>

(一社) 京都府建築士会

# 京都の名工

## 瓦葺師

金戒光明寺 山門

### 【瓦葺師】

瓦は古代朝鮮半島の「百濟」から仏教と共に日本へ伝わったとされている。長い歳月を経て一般住宅でも使われるようになったが、昨今は減少傾向にある。社寺仏閣・文化財等の現場では多く使用されているものの、瓦葺師の活躍する場は少なくなりつつある。そんな厳しい状況の中でも活躍されている二人の瓦葺師にお話を伺う。(金戒光明寺山門修復工事現場にて)



きむらしんいちろう  
木村紳一郎さん

(有)竹村瓦商会 瓦葺師  
昭和47年(1972)岐阜県生まれ  
一級瓦葺技能士  
平成20年度 明日の名工



まえだよしのり  
前田義則さん

(有)竹村瓦商会 瓦葺師  
昭和28年(1953)熊本県生まれ  
一級瓦葺技能士  
平成14年度 現代の名工

一  
昨今、建設業界において職人の技術を発揮する場が減少し、職人の取り巻く環境は厳しく、職人を諦めていく人もいる。しかし、高い技術を持った職人の存在は絶対必要不可欠である。いまこそ、この京都で名工を見つけたい。

# 竹村瓦商会の仕事



清水寺 三重塔



清水寺 馬駐



清水寺 田村堂



清水寺 仁王門



東寺 東大門



妙心寺 山門



妙心寺 仏殿



妙心寺 法堂



妙心寺 南総門

屋根瓦は建物や時代によって表情が異なり、人の手で作られた鬼瓦は一つとして同じものはない。棟積には、蔓唐草と蔓巴の上に熨斗を積んだ「蔓棟」や、輪違い・菊丸・青海波などで組み合わせた「組棟」がある。軒丸瓦には巴文や寺紋・家紋を入れたものがある。このように様々な表情を見せるのが屋根瓦の魅力であり、瓦葺師の職人技の見せ所である。

## ▼鬼瓦



金戒光明寺 山門



金戒光明寺 山門



清水寺 馬駐



清水寺 三重塔



妙心寺 山門



妙心寺 仏殿



妙心寺 法堂

## さまざまな表情を見せる屋根瓦

## ▼棟積(妙心寺仏殿は、蔓棟。その他は組棟。)



妙心寺 仏殿



清水寺 仁王門



清水寺 馬駐



清水寺 田村堂



東寺 東大門

## ▼軒瓦(妙心寺法堂は、寺紋入りの軒丸瓦。その他は巴瓦。)



清水寺 三重塔



清水寺 馬駐



妙心寺 山門



妙心寺 法堂



東寺 東大門



## 金戒光明寺山門の 屋根修復工事について

今回の金戒光明寺山門<sup>\*1</sup>では鬼瓦などの役物と下層の西面を除くすべての瓦を新調しました。この工事で使用された瓦は、三河の瓦です。砂気を含んだ粒子の荒い土の性質から、高温で焼いても曲がりにくく凍害に強い瓦です。

葺き替えは元来の土葺きではなく、空葺き<sup>\*2</sup>で行うことになりました。瓦が落ちないように平瓦を一枚一枚銅線で縛っていききました。棟積も同じです。空葺きは調整が難しく、特に屋根の反りを作り出すのに苦労しました。

## 屋根勾配について

山門の屋根は上層と下層があり、上層は矩勾配です。下層のほうが上層に比べて勾配は緩やかです。反り屋根の場合、軒先の勾配が緩くなり雨水が溜り易くなるので、平瓦は3枚重ねで、1枚が割れても雨漏りしないようにしています。葺き足は瓦の大ききで決まり、平瓦の葺き足は4寸5分になります。この修復工事では3万枚の瓦が使用されました。



上層の屋根



下層の屋根

## 直線はまっすぐ、 曲線は滑らかに

屋根の軒先の線は、生命線と呼ばれるくらい大事なところで、軒巴（軒先の丸瓦）の上端はまっすぐに通し、軒反りは緩やかな美しい曲線が出るようにします。そのためには敷き平瓦と瓦座がきっちり納まっていることが大事で、瓦葺師が敷き平瓦の形状を瓦座に光付けし、その線に従い大工さんに瓦座を削ってもらいます。この光付けが軒反りの美しい曲線を出すための大事な作業となります。それから、棟積の線、降棟・隅棟の線が綺麗な曲線を描いていることも大切です。棟や箕甲などは、瓦納まりの施工図や原寸図を描き、十分な検討を行うことから葺きます。

土葺きの場合には多少、融通が利くのですが、空葺きの場合には、瓦下の木下地からしっかりと作らないと美しい曲線が出ません。大工さんに細かい内容を伝えて、木下地を作ってもらいます。美しい屋根の線を出すのも大工さんの協力が必要となります。

## 葺き土について

下層の西面は、既存の瓦を使用し葺き土を使って葺きました。何年も寝かした土を使います。即席で練った土は駄目です。何回も練って粘りを出します。粘りのある土は、粘着性が出て瓦との密着度が高まります。文化財の仕事では、既存の土を降ろして新しい土を追加し練って使うこともあります。

## 絶対に雨漏りをさせてはいけない それに美観が求められる

瓦葺く時に一番、気をつけているところは「雨漏りをさせないこと」です。特に大きな屋根は、雨量も多いので葺き方には十分気を付けなければなりません。勾配がきついほうが雨漏りはしにくいのですが、きつすぎると屋根が大きくなり、不恰好になります。そのバランスが難しいです。

## 当時の信仰心の強さと

## 仕事に対する熱意を想像する

当時の信仰心の強さと仕事に対する気持ちは想像できないくらい凄いものだったと思います。こんな大きな屋根を機械もないのにすべて人力でやっていたと考えると、我々は恵まれています。この時代に生まれたいことを感謝しないとイケません。機械があるおかげで、工期を短くすることができ、

たくさん現場に携わることができそうです。

## 瓦ばかりでなく

## 建物に関する知識が必要

屋根は建物外観の半分近くを占め、瓦のでき具合で、建物全体の美観に影響を及ぼします。屋根瓦と建物の調和が大事で、完成した時の姿を予想しながら、葺かなければいけません。屋根瓦は、そういう重要性を持っていきます。瓦のことだけ考えて仕事をしたいはいけません。だから、建築に関するところを見るなり聞くなり勉強することが必要です。

## 京都でさまざまな時代様式と 瓦の歴史・奥深さに触れる

我々の大先輩である先人の技術を学ぶために、休日には、双眼鏡を持って京都中の古建築を見て回りました。また、会社の近くには妙心寺という大きなお寺がありますので、分らないことがあれば駆けつけて見に行つたものでした。今まで、歴史ある京都で国宝・重要文化財の仕事させてもらい、いろんな時代様式の瓦に出会うことができ、瓦の歴史の奥深さを知りました。京都という土地だからこそ、たくさん勉強ができたと思います。

## 最大限の技術を発揮する

京都の社寺建築は観光名所が多く短期間に修復工事を終わらせようと工期が短く設定されていることが多いです。予算も厳しいこともあり、手間を掛けていられない場合もあります。しかし、瓦は何百年も残っていくもの。そこで手を抜くことは考えにくいです。恥ずかしい仕事はたくさんありま

せん。予算内で納めることは第一条件ですが、その中でできる限りのことはやりたいと考えています。今まで引き継がれてきた技術を後世に引き継ぐためには、最大限の技術を発揮していく。これが伝統を守る方法であり、後世へと引き継がれていければと思います。

インタビュー

木村紳一 郎さん



## 金戒光明寺山門の下層

私は主に下層の屋根を葺きました。下層には受け平という瓦があり、上層から落下してくる雨水から丸瓦・平瓦を守ります。下層の屋根の特徴は、上層よりも勾配が緩

いことですが、その理由は、上層の屋根ほど雨が当たらないので勾配をきつくする必要がないというのがあります。上層よりも屋根面を小さくし見た目のバランスを取るためだという話も聞いたことがあります。勾配の緩い屋根は、勾配のきつい屋根よりも雨仕舞に気をつけて葺かなければならないので、余計に気を使います。

## 瓦を葺くのも捲るのも好き

仕事をしていて不思議と「辛い」と感じることがありません。工期が厳しくて休日も出勤しなければならぬ時もあります。瓦を触っているうちに辛さはどこかへ飛んでしまっています。

## 一人では瓦は葺けない

一人ではこのような大きな屋根は決して葺けません。みんなの協力があってこそ葺き上げることができます。人間関係がギスギスしていたら仕事への意欲さえ失ってしまいます。だから、いつもチームワーク。人の和を大切にしています。

## 心を込めて葺くこと

仕事をする上では何でもそうなのかもしれませんが、「綺麗に葺けた」と結果にこだわらただけではなく、心を込めて葺くことが大事だと思います。常にそのような心掛けで葺いていけば、結果が後から付いてくると思います。「なるべく瓦が長く持つように。下から見ておかしくないように。」を心掛けて葺いています。

## 瓦の魅力は再利用できるところ

飛鳥時代に作られた瓦が、今でも現役で活躍しています。千年以上も風雨にさらさ

れても残っていく瓦は、何回もリサイクルができる。職人の命は果敢なく、長くても100年。葺き替える時は、次の時代の人へと移り変わっています。瓦を葺く時に込めた思いが、次の時代の人へ伝わればと思います。「こんなことやっているのか。なかなかやるね。」と思われる仕事がしたいです。

## 瓦を捲った時、先人の技術を知る

屋根葺替工事で既存の瓦を捲ると、瓦の下地が表れてきます。この現場の下地の状態は、大変良好でした。瓦が良かったかもしれませんが、葺き方がきちりしていたからだと思います。このように長い月日が経ってから瓦を捲った時、先人の技術を知ることが出来ます。



より大佛の書瓦の既存瓦  
京大佛瓦師は  
井上三右衛門  
であることが判明

## 古い瓦の魅力

古い瓦には何とも言えない魅力があり、修復工事のたびに、「今度はどんな瓦に出会えるのだろうか。」と、いつも古い瓦との出会いを楽しみにしています。瓦は時代によつて形状が異なり、それぞれの魅力があります。

平安時代の瓦葺きの建物はあまり見かけませんが、平安時代は良い瓦が少なく後世まで残らなかったと言われていますし、この時代の屋根は檜皮葺が多かったからだと言われていることがあります。平安時代の建物と

言えば、宇治の平等院鳳凰堂です。昨年から屋根葺き替え工事が始まったそうですが、木瓦葺きだったと聞いて大変驚きました。

鎌倉時代からは瓦葺きの建物が多く残っています。この時代からは良い瓦が多いです。金戒光明寺山門の巴瓦は、三ツ巴と菊の実がある巴瓦で、鎌倉時代から主流になってきた巴瓦です。

京都で仕事をしていると、平安時代以前の瓦には、なかなか出会うことはありませんが、いつか飛鳥時代の瓦に出会うことができたらと思います。

## 瓦作りにチャレンジしてみたい

瓦を葺くばかりではなく、一度、瓦を作ってみてみたいです。古い瓦を真似して作ってみたいですが、まだ機会がありません。そんな時がくればと思います。

※1 金戒光明寺山門

金戒光明寺山門は1400年頃に建立されたが、応仁の乱で焼失し、万延元年(1860)再建。再建されてから初めての葺き替え工事となった。平成25年の秋、竣工予定。京都府指定文化財。

※2 空葺き工法

瓦の下地に葺土(かきつち)を用いずに空葺き(かきまき)と呼称される木材の棧を用い、瓦と銅線を結ぶ方法。建物全体を軽量化するため、近年の新築・改修工事で用いられている。

聞き手・文 広報編集委員会 垣根みき子



# 左官勝本の仕事



妙心寺 霊雲院 築地塀



重秀寺 客殿 茶室内部



重秀寺 客殿 茶室内部



重秀寺 客殿 玄関



重秀寺 客殿 待合

左官は、漆喰・聚楽土の土塗り等、多岐にわたる。  
竹を格子状に編んだ小舞下地に、藁を混ぜた土を塗り重ねる土壁。消石灰・麻等の繊維・糊でつくった漆喰を用いる漆喰壁。  
このような自然素材を使用した壁は、幾つもの工程により丹念に仕上げられていく。  
何年も修行を重ねた職人の技、左官の魅力を再認識していきたい。

## ▼ じゅらく塗の工程



荒壁ねかし

荒壁塗り

寒冷紗貼り

貫伏せ

ひげこ打ち

ちり廻り塗り

斑直し

中塗り (1~3回)

上塗り

上塗り完了

## ▼ 築地塀修繕の工程



こそげ落し

水擦り

五線塗り

中塗り (1~3回)

上塗り

## ▼ 漆喰塗修繕の工程



木摺下地

砂漆喰塗り

ひげこ打ち

中塗り (1~3回)

上塗り



## 生まれは熊本

私は九州の熊本市に生まれ、中学を卒業してすぐに地元で左官の道に入りました。見習いをしていましたが、その頃は高度経済成長期の時代で、若い間に都会へ出たいと思いがあまして、滋賀県大津の親戚の紹介で、京都の数寄屋の建物をやっている左官屋へ行くことになりました。

## 20歳から京都へ

20歳から京都へ来たのですが、京都では土塗りの仕事が多く、私にとっては田舎(熊本)と比べてハンデがありました。なぜな

ら、田舎では土の仕事が一切なく、モルタル、タイル、ブロック積、瓦も葺いており、土に関しては全くの素人でしたので、京都では一からの修行になりました。「塗る」ことにはあまり変わりはないですが、材料の組み合わせ方、どれくらいの割合で合わせればよいか全く分かりませんでした。携わる建物も高級な建物でしたので、気を使わなければなりません。このような気使いは田舎では無く、京都のしきたりや仕事の仕方慣れるのが大変でした。

## 京都での仕事の難しさ

京都では、建物への気使いだけでなく人への気使いも田舎とは全く違いました。大工さんとの取り合いや他工事との絡みなど人間関係が難しく、京都へ出てきて半年後、親方よりも年上の職人さんと揉め事を起こしたことがあり、紹介してくれた大津の親戚のところへ一回引き上げたことがありました。一本木な性格がゆえに、こんなことを起こしてしまいましたが、自分が間違っているとか、間違っていないと言う前に、年上の人に対する気使いが足りなかったと思います。その頃は、まだ辛抱が足りませんでした。

## 住み込みを経験、辛抱を覚える

20歳で京都へ出てきた時に、卯田惣次さんのところで8年間お世話になりました。そこで、初めて「住み込み」を経験しました。住み込みは、食事は与えられるものを食べるしかなく、量が足りない時もあり、我慢しなければなりません。洗濯も自分でやらなくてはならない。住み込みはしんどい面もありましたが、辛抱することを覚えたので、それはよかったです。

## 住み込みから独立へ

卯田さんのところを8年間修行した後、6〜7年は一人であちこちの助っ人を行っていました。今思えば、助っ人で行っていたことで色んな仕事を見ることができ、これはこれでいい経験だったと思います。

そうしてしましたら、小川久吉さんに声を掛けられて、その頃、桂離宮では昭和の大修理が行われており、手伝わまいかと言われ桂離宮の現場へ行くことになりました。

## 桂離宮での仕事

桂離宮での仕事では、小川さんから土の配合については厳しく言われました。と言っても、配合の比率というのは、簡単には出ないものです。壁をこそげた古い土と大亀谷で採れた新しい土を混ぜ合わせていましたが、こちらから取った土は粘っこい。あちらから取った土は粘りが少ない。土の粘さで、どれだけ砂やサを入れるかを自分で判断しなければなりません。ある程度の見極めが必要ですから、左官は「感」の仕事だとも言われています。配合について本に書いてあることがあります。それは一般的な土の配合で、なかなかそのようにいきません。いくら塗るのが上手くても、材料が悪いと綺麗には仕上がらないので、配合の「感」は自分で覚えるしか方法はありませんでした。

この頃の自分は27〜28歳で、自信もついていた。小川さんは「できる人。」と聞いていましたが、「実際はどこまでできるのか見て盗んでやろう。」という気持ちがありました。人がこうや、と言っても自分はどうだ！と意見を持つ。極端な言い方

もしませんが、相手の言葉だけを鵜呑みにするより、自分の考えを持つ。間違っていたら素直に謝り、直したらよいのだから、それくらいの勢いが若い頃にはあったほうがよいのではと、今の私はそう思います。

## 33歳で独立

桂離宮の仕事をやりはじめた頃から「独立したらどうか。」と周りから言われていた。自信がなくて、でも、人の下で働いていたら自分の仕事はできないし、とずいぶん悩みましたが、思い切って独立へ踏み切ったのが33歳でした。

独立して初めての仕事は彦根城博物館で、そこは工事規模が大きく、大手ゼネコンの下に老舗の工務店が入っており、左官屋も何社かで範囲を分担して行っていました。初めての仕事だったので「何とかやってみよう。」という気持ちでいっぱいでしたが、ここでは人を使うことの難しさを知りました。自分より年上の人に仕事をさせるのに説明するのは、なかなか大変でした。最初は何でも自分の思うようにはいかないものです。

そうしているうちに、仕事の依頼を受けるようになり、依頼を受けたら嬉しいもので、つい仕事をたくさん引き受けてしまいで、自分の首が回らなくて困ったこともありましたが、友人の助けもあって一年一年を乗り越えていくうちに、学校を卒業したての若い子を入れるようになりました。入社した若い子には「住み込み」をさせました。「住み込み」を嫌がる左官屋さんもあります。田舎から出てきた子を、せっかく時間をかけて育てても辞めて田舎に帰ってしまうから、と。でも、それを断ると誰も来なくなります。ある程度は仕方がなく、それでも

残ってくれる子がいてくれたら、それでいいと思っています。そうして、人数が固定されてきまして、今に至ります。

独立したての頃は、独立したら自分の思うようにできると思っていました。実際はそんな甘くはありませんでした。独立したから気が付いたことかもしれません。ここまでやってこれたのは影で支えてくれている家族のおかげです。若い子が一生懸命やってくれているおかげだと感じています。

## セメント仕事もできるように

京都の仕事は、田舎（地方）にはありません。内容が違います。京都での修行で習ったことは、どこまで地方でやるかは分からないので、できるだけ色んなこと、例えばモルタル塗やブロック積の仕事もやるようにしています。土塗りの仕事だけでは、一人で独立した時や田舎へ帰った時に対応できません。ちよつとしたブロック積もできるように若い子を指導しています。

いろんなニーズに答えられるような職人でありたいと思っており、「金に糸目をつけないから、日本一のもの！」と言われるたらどこまでできるか分かりませんが、一般の施主さんから仕事を言われた時でも対応できるようにと心掛けています。セメント仕事も綺麗にやろうと思えば難しいです。桂離宮をやった小川久吉さんはセメントの仕事も上手かったです。私は、土塗りの仕事が好きです。でも、土塗りだけにこだわっているのは、いざという時に対応できません。「その時は応援を呼んだらどうか。」と言われるかもしれませんが、少しでもこなせることが私の経営方針です。

その一方、いい仕事は自由時間にマスタ



左官勝本さんの倉庫の裏に、練習できるスペースがあり、ここで試し塗りを行っている

ーすることになっています。仕事でマスターするのは施主に失礼になりますので、忙しい時期の自由時間に鍛錬します。

## 大工さんとの仕事の取り合い

木造建築物の工事では、大工さんが中心です。左官屋が大きく出ると鼻を折られます。そのへんは、うちの若い子が心得ているようで、私よりも対応が良く、安心しています。それが強みでもあります。現場は人間関係が大事ですから、和気あいあいとやっていってこれれば現場はうまく進んでいきます。

大工さんとの仕事の取り合いで重要となってくるのは、壁チリの仕事です。壁チリをどのように出すか、どのように塗っていくのかで木の表情が変わります。木を生かすのも、殺すのも壁チリの出し方で決まり、壁チリをぐちゃぐちゃに塗りつぶしてしま



木を生かすかどうかの、大事なチリ廻りの仕事

つたら木が死んでしまいます。特に丸太の木は、壁チリをどのように見せるかで木の値打ちが変わります。大工さんの仕事を壊さないようにするのも左官屋の仕事です。

## 時代の流れに合わせながら

建売住宅でも左官の仕事が少なくなってきました。タイル仕事も玄関ポーチぐらいです。左官の魅力アピールすることから、左官は自然素材を使うことが多いので、健康に良いということでしょうか。マンションでも土塗りの仕事があります。設計の先生でたまたまそういうことをする方がおられて、壁と天井を土塗りで施工しました。また、石膏ボードに漆喰を塗る仕事がありますが、これはなかなか難しい仕事です。時代の流れなので頼まれればやってみていかなくてもはなりません。情報収集してやり方を勉強すべきだと感じています。時代のニ

ズを把握しておくのも大事なことです。

## 若い職人さんに伝えたいこと

私はいま、若い子に譲る格好になっています。ここにいる若い子が新しく入った若い子を育てていけるようになってほしいです。今の時代は厳しくて、若い子にとっては本当にツライと思います。しかし、厳しいからと言って金ばかりに走る者には、決して任せたくありません。私の考えを片隅にでも置いてくれて指導者として成長してくれたらと思います。



勝本さんと若い職人さんたち  
(左より 久木田さん、正満さん、勝本さん、田中さん、横山さん、椿さん)

聞き手・文／広報編集委員会 垣根みき子

## 竹

### 【竹】

竹は古くは縄文時代から身近にあり、且つ加工のしやすい材料として籠などに使われ、やがて様々な生活雑貨から建築に至るまで、人々の生活を支える親しみの深い材料となった。しかし現在その需要は減少傾向にあり、一般住宅などで使われることはあまり見かけられなくなった。そのような中で300年以上にわたり代々「竹」に携わり続けてきた名工にお話を伺う。

# 二

### 竹又の仕事



黒もじ平垣



照明器具



内装照明



犬矢来



なかがわひろあき

中川裕章さん

竹又 中川竹材店  
昭和46年(1971)京都市生まれ  
竹工芸一級技能士  
一級建築士  
一級造園施工管理技士

「昨今、建設業界において職人の技術を発揮する場は減少している。長年において培われてきた高い技術が失われつつある。そのような現状において、いまこそこの京都で名工を見つけ出したい。」

# 竹の加工



工房の様子



様々な道具



転がらないように専用の台に乗せて切る



竹割り



竹を細く割く



皮むき

竹の一番の特徴は加工のしやすさにある。  
切る、割く、曲げる、束ねる、などの加工を加えることによって、竹垣などのオーソドックスな使われ方から、  
内装材や小物まで、その用途は多岐にわたる。  
加工の過程や様々な実例を見ることで、改めて現代における新たな可能性を発見したい。



建仁寺垣



大津垣



青竹御簾垣



桂離宮垣



松明垣



竹枝穂垣



金閣寺垣



格子天井



## 竹について

### 竹の種類について教えてください。

まず天然の色の違いで、青竹、黒竹、紋竹などがあります。紋竹は白竹の上に茶色の雲状の斑。それから煤竹といって、古民家などの天井に使われていた竹が長年囲炉裏から出る煙で燻られて色がついたものがあります。染色する方法もあります。染めるにはまず油抜きを行って白くしてから、染料の入った釜で30分ほど煮込んで染め上げます。紋竹は特に京都、黒竹は和歌山や四国が産地として有名です。

### 竹の利点欠点は？

利点は、割ったり、剥ぐ（竹の厚みを薄くする）などの加工性が良いことと、竹の表皮の曲げても折れにくい弾性に富む性質を利用し、様々な用途に用いることができること。日本には古くからその特性を利用し、竹を活用してきた歴史があり縄文時代には竹で編んだ籠が残されているし、正倉

院には楽器などの竹製の工芸品が納められています。

欠点としては、天然素材の為、雨などの水に弱いことや、丸竹のまま使用すると割れが生じやすいことなどがあります。昔は虫害が多かったのですが、最近では竹材も薬剤の真空加圧注入による防虫処理ができるようになり、建築内装材での耐久性が向上しました。

### 竹は植林などするのですか？

竹は木材とは違って、計画的な植林をするのは難しいです。竹の特性として、たけのこで土から出てきた時の太さのまま成長し、枯れるまでずっと同じ太さです。同じ真竹でも直径3cmのものもあれば10cmのものもある。また、地下茎で竹は繋がっていて、ひとつの竹藪で生えている竹の太さはおおよそ同じなので、様々な太さの竹を用意する為、複数の竹藪の地主さんをお願いして伐採させて頂いている事が多いです。

### 中川さんのところで伐る？

京都の竹材産業は大きく分けて、竹藪で竹を伐る竹屋さん（一次産業的）とその竹を加工して製品をつくる竹屋さん（二次産業的）に分かれていて、当店は後者の竹材を加工して製品をつくることを主にしています。

### 京都の竹の特徴は？

竹は日本の本州から九州地方にかけて広く自生している植物です。その中で京都の竹の特長のひとつは、京都の気候として夏暑く冬は底冷えのする寒さ故によく生育し、硬くしまった竹が採れます。また、風土としても平安時代より都として栄えたこともあり、竹工芸が盛んになった事で竹の産地としても栄え、多くの職人たちが伝統技術を磨いてきました。良質の竹を採るために間引きなどの竹藪の手入れをし、笹が

竹の幹にこすれ、傷がいかないようにしたり、青竹を白竹などの銘竹にする油抜きの伝統技法などは京都は特に優れていると思います。この油抜きの技法は2通りあって青竹を熱する方法に火で焙る方法と熱湯につける方法があり、前者の方法を火焙り式（乾式）といって表面に銚色の艶のある綺麗な白竹に仕上がります。京都は特にこの火焙りでの油抜き技法が優れていて、この方法で仕上げた白竹は京銘竹のひとつとして京都府の伝統工芸品に指定されています。

### 火を使った油抜きは京都でしかできない技術？

そんなことはないですが、数寄屋建築の仕上げに用いられるなど、きれいな竹に対する需要が京都では圧倒的に多いからです。

### 油抜きは一次？二次？どこでおこなっている？

一般的に油抜き作業は一次産業的な竹屋さんで行います。京都は京都市の西の大原野や乙訓方面に竹藪が多く、そこに竹屋さんも多くあります。

### 竹はどういったところに使われますか？

下地窓、落とし掛け、垂木、竿縁天井、床柱、床框といった数寄屋建築の仕上材、それから犬矢来、竹垣、後は籠などの竹細



竹細工によるかご



白竹の酒器と猪口

工や料理用の器などでしょうか。昔は竹小舞といって土壁の下地材としてもよく使われていました。

### 数寄屋建築と籠では必要な技術がぜんぜん違うのでは。どこまでが範疇？

建築材料に関しては、材料のまま納めさせて頂いたり、部材加工した上で納品することもあります。庭園関係では、造園屋さんのもとで特殊な竹垣の場合、現場に向いて仕事させて頂くことも多いです。かごなどの工芸品については、発注元は様々ですが、特注品を制作することが多いです。いずれにしても竹を加工する伝統技術は基本共通になりますので、TPOに合わせてうまく竹と技術を調和させることが大切だと思います。

## 京都以外に竹細工の盛んな地域は？そこの違いは？

別府（大分県）なんかも竹細工が盛んですね。別府はどちらかというと日常生活に使われる民芸品のようなものが多い。京都はお茶やお花の世界で使われる道具のニーズが高いですね。

## 中川竹材店独自の技術は？

竹を加工する伝統的な技術は代々受け継がれてきたものがその店ごとにありますので、具体的にこれというのには難しい。竹と竹を並べて隣同士の節があたるところを相欠きして隙間なく結合する『とくさ』と呼ばれる技法があります。非常に手間のかかる仕事ですがこの技法にも当店独自のノウハウがあります。



とくさによる結合

## 中川竹材店について

### 京都に竹屋さんは何軒？

当店は京都竹材商業協同組合に加入していますが、現在25軒あります。その他の組合がありますし、組合未加入のところもありおおよそ50軒以上はあると思いますが、毎年減少しています。

### 創業は？

元禄元年（1688）です。現代表の父で10代目。よろずやみたいなものをもって

いた本家で竹を中心に扱っていた初代が分家独立したようです。最初は材料屋だったのが明治に入って加工も始めたようです。

### なぜ竹屋を？

大学を卒業後、約10年ほどプレバブ住宅メーカーに勤務していました。竹屋の長男に生まれたこともあり、それを運命と思いい家業である竹屋に戻ってきて現在に至ります。

### 何人働いておられる？

父、叔父、職人4人と私で7人です。仕事内容により作業担当が決まります。竹垣の現場などへは2〜3名ほどで行くことが多いです。

### 近年の主な実績は？

京都迎賓館の庭園にある竹垣を施工いたしました。また造園屋さんのもとで京都御



桂離宮の竹垣。竹を生きたまま曲げて竹垣としている

所や桂離宮などの竹垣をさせて頂いています。海外などの事例ではフランスパリにあるシャネル本社の竹垣を手がけました。

## 現況について

### 竹をとりまく景気の現況は？

ニーズがなくなってきたのは間違いないありません。30〜40年前までは竹小舞を下地にした土壁の家がまだ多く建てられていました。父が私くらい歳のときは、住宅や地方に旅館がほんぽん建てられ、客室の床柱用に角竹が飛ぶように売れていたそうです。作ったら作っただけ売れたようです。今は角竹は一年に一本売れるか売れないかです。町家なんかでも以前は年末にしたらえ品なんかを新調してお正月を迎えるという風習がありました。今はあまりありません。それどころか町家自体が減っています。庭の竹塀なんかも現在はプラスチック製がよく使われています。

### 自然の竹をどうやって施主に訴えれば？

竹垣で雨の当たる場所の場合、どうしても天然竹垣は朽ちていってしまいます。できたとときの青竹のうつくしさはもちろん、少しずつ青竹が日に当たって白く移ろい、やがて、庭の一部として寂びた風情を醸し出す経過を施主さんが楽しんで頂けるかだと思えます。

プラスチック製が一概にダメということではなく、耐久性が必要な場合などプラスチック製がいい場合もあります。でもせっかく日本にはいい竹がいっぱい生えていて身近にあるのだから、できれば自然の竹を使ってほしいというのが本音です。

### 現代的な新しい取り組み。

京都プライベートホテルさん、京都大学さ

んと共同で都市景観に配慮したビニルハウスを研究開発しその構造体をすべて竹にて制作しました。このプロジェクトはグッドデザイン賞を受賞することができました。また、クリエックというフランスのシャンパンメーカーの依頼で、竹製のボトルクーラーを制作しました。他にも国内外を問わず竹で作るものづくりに関して、幅広い取り組みをさせて頂いています。



バンブーグリーンハウス



クリエックボトルクーラー

聞き手・文／魚谷繁礼、池井健

# 茅葺

西行庵（京都市東山区）  
2013年9月  
浄妙庵 茅葺屋根葺替工事 竣工

## 【茅葺】

かつて日本集落の民家の屋根は、ヨシやススキなどを使った茅葺が主流であった。茅葺は火災に弱いことから都市化が進んだ地域では規制され、過疎化した農村においては修繕されないままに、その姿を消しつつある。茅葺職人が高齢化によって減少する状況の中、全国各地の茅葺の葺替え、修繕に奔走されている名工にお話しを伺う。

# 四



やま だまさし  
山田雅史さん  
山城菅葺屋根工事 代表  
昭和43年（1968）京都府生まれ

昨今、建設業界において職人の技術を發揮する場が減少し、職人の取り巻く環境は厳しく、職人を諦めていく人もいます。しかし、高い技術を持った職人の存在は絶対必要不可欠である。いまこそこの京都で未来に光を照らす名工を見つけたい。

（社）京都建築

# 山城萱葺屋根工事の仕事



数内家 燕庵



高台寺 時雨亭



平野屋 仙翁庵(鳥居本)



鮎の宿 つたや(鳥居本)



極楽寺(鎌倉市)



可喜庵(東京都町田市)



祇王寺(鳥居本)



澤井家住宅(京田辺市)



永谷宗円生家

温暖化、CO2排出が懸念されている今、茅葺の建物は、エコロジカルであり、人間本来の生活に近い理にかなったものである。しかし、近代化された生活様式や都市化された地域においては、茅葺屋根にすることは難しい。茅葺は日本の原風景であり、里山の風景に溶け込み、そして我々の心を和ませてくれる。我々、建築を作り出す者たちは、この貴重な茅葺の存在を忘れずに、存続していける方法を探していきたい。

## 西行庵



既存の茅葺きを撤去した後、茅を葺き始める



葺き始め半ばの状態



形を整えながら茅を置く



たたきで形を整える



軒茅を揃える道具「ていた」



茅をはさみで刈り整える



の茅葺屋根の葺き替え、修繕を行っています。

## 現代における茅葺の難しさ

茅葺は、断熱・保温性・雨仕舞・通気性・吸音性に優れており、屋根材としては最高の材料だと思っています。ですが、茅は可燃材ですので、飛び火すると他へ延焼してしまうのが最大の弱点です。

つい最近の出来事として、滋賀県高島市マキノ町の在原集落では、痛ましい火災で、多くの民家が焼失してしまいました。伝建地区には指定されておらず、観光地化されなかったという良い面はあったのですが、伝建地区であれば、放水銃などの補助も受けられ整備ができ、このような大きな被害にならなかったと想像され、何とも悩ましいです。

だからといって、茅を不燃材にすることはできないですし、やろうとすることも無意味だと思います。茅は、燃えても毒ガスを発生しないので、ガスを吸って逃げ遅れることは少ないと聞いていますし、「放水銃を整備し、防火訓練をしっかり行う」という取組みをしていけば、被害は最小限にとどまるかと思われれますが、これも、これからの課題です。

(一社)日本茅葺き文化協会の集まりで、「新築の茅葺ができるように、みんなで結束して働きかけていこうではないか」という話が上がりましたが、防火地域や法22条地域などの法律をどう捉えるか、どのようにしたらよいか、まだ具体的な施策が出ていない状態です。

国や地方公共団体にも、もっと考えてほしいです。

## 京都の茅葺職人の役割

もう一つの問題として、過疎化した地域では後継者がいなくて修繕されず、放置され朽ちていくばかりだということです。

我々の前世代の人達、今の70代は、高齢化が切実で弟子が取りたくても取れない状況でした。それはなぜかと言いますと、昭和40年頃から茅葺屋根を鉄板で覆われることが多くなり、茅葺が職業として成り立たなくなってしまうからです。若者の職業の選択肢から外れてしまった訳ですから、後継者が育たなくなりました。最近になり「世の中から茅葺が無くなってしまおう」と騒ぎ始めた結果として、我々40代から下の世代がいます。世代としては30年空いています。50代、60代がとも少なく、40代、30代は、かなりの数がいます。

茅葺職人は、全国で100人いますが、面白いことに、その五分の1の20人が京都にいます。競争なのか共存なのか、やたらと京都にはたくさんいますが、同じパイを取り合っていましたら、お互いがつぶれてしまいます。ですから、茅葺職人がいない地域へ目を向けるようにしています。全国には、まだまだ茅葺職人が足りない地域がありますので、京都の職人が全国各地の茅葺減少を食い止めるのにお手伝いができるばと考えています。地元の職人さんが、地元で育つのが一番良いと思いますが、地元の職人さんがいないのであれば、その地域の葺き方をきちんと研究し、その地域なりの葺き方を保存するのが、我々の役目だと考えています。

## 茅葺は建築物のみの文化ではない

地面に生えてくる草を毎年刈る、その副産物が茅となり、屋根にのせるといふ農村のシステムがありますので、屋根に茅がほしいために草を刈った地面が二次的な豊かな自然を生むことが重要だと考えています。秋の七草は茅場で生える草です。毎年、草を刈ったところが草原になるのです。毎年、草を刈らずに放置しているところは草原とは呼べず、藪になります。江戸時代初期までは、草原が国土の10%ありました。現在は、国土の1%ぐらいです。里山がどんなところか定義するとしたら、山を使いながら山を枯らさず、計画的に使ってきたことで、その状態が保たれたところだと思います。それによる技術が茅葺で、どちらかと言えば農村の技術です。

農村では茅を貸し借りすることで、村全体が共同体であったと言えます。街では労働の代価としてお金を得て、衣食住の全てをお金で買いますが、農村では自分の労力の何割かで自分の家を直す、食物を作ると他の種類を作っている人と交換するといふ、お金を介在しない経済が農村にはありました。その象徴が茅葺の建物だったと思います。

## もうひとつの重要な仕事、それはヨシを刈り、売ること

山城葺葺屋根工事は四代続くヨシ屋ですが、現在、京都府では唯一のヨシ屋で、二つのヨシ場を管理しております。

一つ目は、琵琶湖から大阪湾にたどりつくまでの淀川の中程、京都の伏見にありま

## この道に進んだきっかけ

私は、四代続くヨシ屋に生まれました。

京都建築専門学校を卒業し、3年間、建築の現場監督をして、その後、家業のヨシ屋に戻り、茅材販売をやっております。しかし、主な商品であったすだれは中国産に取って代わり、ごく限られた量になってしまいました。お得意さんだった茅葺職人さんもどんどん減り、残った職人さんは高齢になり、これはもう自分で使わなければどこにもヨシは売れないということで、自ら茅葺職人になることを決意し、ヨシ屋を傍らに茅葺の修行を始めました。今は、5人の弟子と1名の文化企画担当と共に、全国

す。ここは、大正以前は巨大な池で、巨椋池と呼ばれており、現在は築堤・埋め立てられ、1km程の川幅の堤防内に35ha程のヨシ原が残っており、数多くの野鳥が生息しています。かつて、この地域ではこのヨシを刈り、売り、生計を立てている人々が多くいましたが、現在ではうちだけになってしまいました。

さて、このヨシ場では、生えているヨシは長く、3〜4mのものが多いです。琵琶湖産のものとはほぼ同じ姿をしています。ヨシの他にもオギという植物が生えています。うちでは、オギをオンヨシまたはオトコヨシと言ひ、反対にヨシをメンヨシ、オンナヨシと読んでいます。

オギは、あまり聞き慣れないかもしれませんが、屋根を葺くには十分な素材です。弾力性があり、安心して押さえ竹を強く締めることができます。オギの立ち姿はヨシに似ているのですが、葺いてしまうと、スキに似ています。というのも、幹が中空、空洞ではなく中綿が入っていて、断面が赤や白になるからです。しかし、一カ所だけ短所があります。株が極端に硬いことです。硬すぎて、仕上げのハサミをかけるのが非常に困難です。

うちにはもう一カ所管理しているヨシ場があります。淀川のずつと下流の大阪市の街中、淀川を挟んで、梅田と十三という都会の真ん中にあります。この大阪のヨシ場は海に近く、ヨシは潮に浸かります。満ち潮時には、ヨシ原の半分が水に浸かります。海水の塩分がヨシにとってストレスになり、大きくなれず細くて、きめ細やかなヨシになります。長さは1.5m〜2.5mで細く、ちょうど北上川のヨシによく似ています。

茅葺の中では高級なヨシで、茶室など美しさを強調しなければならぬ建物に適しています。藪内家の燕庵や高台寺の時雨亭で使われています。

うちのヨシの刈り方ですが、京都伏見のほうは沼地ではなく、ほぼ陸に上がって、中を車で自由に行き来できるので、トラクターを利用します。十三(大阪)は半分ぬかるみで、しかもヨシ自体が細いため、カマで作業しています。国交省に許可をも



上:伏見(京都)のヨシ場  
下:十三(大阪)のヨシ場



伏見のヨシ原:かつては石田三成が、このヨシ原を管理し、軍資金に活用されていたと言われていた

## ヨシ屋が抱えている問題とその取り組み

ヨシ原の維持には、「野焼き」が欠かせません。ヨシ焼きは新芽の生育を促進し、雑草や他の植物が繁殖するのを防ぎます。ところが、2010年3月に行ったヨシ焼きが予定していないヨシにまで火が入ってしまった、その煙によって近くの国道1号線が一時通行止めになり、京都市から廃棄物処理法違反に当たるとして禁じられたことがありました。

現在の法律では、野焼きは何人もしてはいけないと定められています。では、なぜ他のところでは行われていると言いますと、風俗慣習や宗教行事、国が認める草刈など、特例において認められているからです。たった一軒のヨシ屋の営利では認められないということ。その後、ヨシ焼きを断念してしまいました。ヨシ焼きができない状況でヨシ刈りをしていきますと、ヨシが他の植物に負けて、細くなっていくのが目に見えて感じられ、このままだと生態系に影響を及ぼし、このヨシ原が消滅するのではと危機感を募らせておりました。

そうしていますと、このことが3回に渡って京都新聞に掲載され、この記事を読んだ伏見楽舎さんから「ヨシ焼きというものが伝統になるのではないか。生き物のためになるのではないか。」とお声を掛けていただきました。伏見楽舎さんは、宇治川沿いのヨシ原で、毎年、ツバメの観察会を開催している市民団体です。伏見楽舎さんを中心に約15人のメンバーと共に「伏見のヨシ原、再発見!プロジェクト」を2012年6月に立ち上げました。市民向けの公開講座を開き、ヨシ焼きへの理解と協力を得られるよう呼びかけ、伏見のヨシが市無形民俗文化財の三栖神社(同区)の炬火祭でたいまつに使われていることを伝えていきました。

このように、京都市や消防などに度重なる協議をした結果、これまで1日で焼いていた面積を4分割にして焼くことを条件に、ヨシ焼きの復活が認められました。ヨシ焼きがヨシ原を守るための地域の財産だと認められたのです。

2013年3月、プロジェクトを発足してから初めてのヨシ焼きを行いました。その行事のタイトルが「新生ヨシ焼き 住民によるヨシ焼きスタート」で、地域の行事にまでとなりました。

今後もヨシ焼きが毎年行われ、伝統行事として定着し、更なる活動で、ヨシ原が守られていくことを願っております。

聞き手・文/広報編集委員会 垣根みき子



# 鍔金物

## 【鍔金物】

建築に使われる金物に、機能を備えつつ装飾を施された鍔金物がある。  
鍔金物の技術は長い歴史の中で発達し、その技術は、決して一朝一夕では身につけることはできない。  
古都、京都の文化で培われた技法を代々受け継ぎ、作品の制作に日夜研鑽されている名工にお話を伺う。



まつだ きよし  
松田 聖さん

鍔屋 有限会社 松田 代表取締役  
昭和36年(1961) 京都府生まれ

「昨今、建設業界において職人の技術を發揮する場が減少し、職人の取り巻く環境は厳しく、職人を諦めていく人もいます。しかし、高い技術を持った職人の存在は絶対必要不可欠である。いまこそこの京都で未来に光を照らす名工を見つけたい。」



象嵌引手  
金・青金箔象嵌・銅  
金鍍金



剣御殿  
銅製  
黒漆塗り



天銀 玉子  
銀・銅製  
黒漆塗り・素銅煮色小座



黒漆塗り・猪ノ目透  
銅製  
黒漆塗り 素銅煮色 敷座



におい梅透かし  
銅製・銀底  
黒漆塗り・銀めっき



宣徳 煮色 丸  
真鍮製  
たき出し宣徳



七宝焼き 引手  
銅製  
七宝焼き・黒漆塗り



千鳥(ちどり)  
真鍮製  
うるみ漆塗り

銚金物には金鍍金、象嵌、七宝など豪華なものや、黒漆塗り、宣徳、うるみ漆塗りなどの様々な趣向を凝らしたものがあり、素材も金・銀・銅など多岐にわたる。花鳥風月、四季折々の風情を形に表現したものもある。職人の繊細な技術で施され、魂を込めて作られた銚金物は素材が持ちうる美しさと輝きを放つ。美を凝縮した銚金物の魅力、その存在を忘れずに感じていたい。



戸引手 トンボ付き  
銅製  
金鍍金・腐底



硯(すずり)  
銅製  
黒漆塗り



御殿引手(三つ葉葵紋入り)  
銅製  
金鍍金・手彫り彫金



牡丹透かし玉子  
真鍮・銅製  
うるみ漆塗り 金引小座



純銀 玉子  
純銀製  
彫金「魚々子」



鍔(袈裟用)  
銅製  
七宝焼き



コンセントプレート  
銅製  
七宝焼き



宝輪型 釘隠し  
銅製  
金鍍金(墨差し)

京都府



## 七代続く銚屋に生まれる

私の営む銚屋は、文化6年（1809年）から続いており、私は八代目になります。八代目と言っても京都では珍しくはありません。もとは、三条のあたりでやっておりましたが、現在は宇治市槇島町の工房でやっております。

この仕事は銚職と言いまして、鑄造・鍛造・彫金・象嵌・七宝などの金属加工の方法で金属を芳しく細工する職業です。

主に、襖引手・御殿引手・釘隠し・屏風金物・神社仏閣銚金具・格天井金具・銚金具全般及び文化財の修復・復元品等を手掛けています。



代々受け継がれる道具は松田家の財産  
同じような道具だが、微妙な使い勝手で使い分ける

この家業を継いだ経緯はあまり深くはないのですが、父は私に家業を継がせたかったらしく、学生の時によそでアルバイトをしていたら「お金出すから、うちを手伝え！」と言われて父親の仕事を手伝うことになり、元々、ものを作るのが嫌いではなかった私は、父の思惑にすっかりはまってしまいました。しかし、その一方、母親は「後を継ぐのは止めとけ。それより勉強しなさい。」と言っていました。「後を継ぐ人がいないことより、生活していくのが大変だから。」と。この仕事は一人でコツコツやっているだけの仕事だと思われがちですが、実際はそうではありません。メッキもやっているのです。排水処理の公害防止管理者の資格が必要ですし、その他にも色んな資格を取らないといけないので、結構、大変な仕事です。

大学生になる息子が、卒業後に後を継ぐ

と言っていますが、業界の景気はますます悪くなっており、大丈夫だろうかと心配しています。昔は問屋さんが仕事を沢山持ってきて、こちらがこなせず断るくらいでしたが、最近は「こんな作りましたから置いてもらえませんか。」とこちらから問屋さんにお願する次第です。問屋さんも昔から比べたらすっかり数が少なくなりまして。自分から行動しないとやっていけない時代だと痛烈に感じています。

それから、この職業をやるのには、これだけの道具を揃えなければなりません。私は代々から引き継いだ道具を使っているのですが、何とかやっていけていますが、一から揃えるのは大変です。一度廃業してしまうと、道具のみならず技術までが引き継がれず無くなってしまいます。苦しい時代ですが、そんな葛藤を抱きながらも、代々続くこの仕事を大切に何とかやっていきたいと思っております。

## 切磋琢磨し合える環境が職人の技術を発展させる

もとは、三条あたりでやっていたと言いましたが、三条界隈は職人の町でした。御所を中心として技術を競う人間が多かったです。納めるところが御所や二条城だと変なもの納められない、という意識でやっていたと思います。仲間でありライバルでもあり、お互い切磋琢磨して自分の技術を磨き、自然と技術が高くなっていったと思います。

しかし、職人の数が少なくなるとライバルも少なくなり技術も衰退してしまいます。地方で京都の職人に仕事の依頼があるのは地方には職人さんの数が少ないからで、地

方から仕事の依頼があるのは有難いことですが、地方の厳しさの深刻さを感じざるを得ません。切磋琢磨し合える環境が職人の技術を発展させるのですが、継続的な需要がなければそういった環境を維持することができません。建築業界だけの話ではないと思うのですが、景気の変動には戸惑いを感じます。

## 引手を作る技術から文化財修理まで

銚金物の仕事は引手を作る技術が基本です。そこから何でもできますし、応用が利きます。色んなものを作るには、色んなものを見ておかないといけません。「いいもん作るなら、いいもん見とけ！」とアドバイスしてくれる人がいて、その人が文化財の仕事を紹介してくれることもありま。修理することによって、その技術を学ぶことができます。修理の仕事は新しいものを作るよりも難しいです。どうやって作っているかが分からないと仕事できませんし、綺麗に仕上げすぎてもいけない場合もあります。そのへんを勉強しながら文化財の仕事もやっております。

## 銚金物には人を楽しませる力がある

大学時代の先輩でお寺の住職をしている人からの依頼で引手の中にクワガタの形の金物を入れたものを製作したことがあります。クワガタだけでなく、トンボやその他の動物を入れた引手【※1】を製作し建具に取付けました。その人から聞いた話ですが、お参りに来た子供が「玄関に面白い引手がある。」と驚き、他の部屋にも面白い

引手があるのを見つけて全部の部屋の引手を見て廻ったそうです。それをとても面白がって楽しんでいました。

お寺はお参りするだけでなく、話をするところでもあるので、これらの引手がコミユニケーションのツールとしてその役目を担っていました。大袈裟かもしれませんが、鍔金物には人と人とのつながりを深めていく力があると思います。

引手だから何でもいいやと機能だけを求めるだけではなく、そこに遊び心を入れれば、人々を楽しませる空間作りができると思います。鍔金物の力を知っていただきたいです。

## オリジナルで製作できることを伝えたい

施主さんには和が好きの方が多くみたいですが、なかなか職人までは伝わってきません。もし、お施主さんと直接お話しされる設計士さんが「このカタログの品番で言えば何番です。」のようにカタログだけで説明されているのであれば、変わったものやオリジナルなものを作ることができません。



【※1】テントウムシ・トンボ・クワガタの飾りが入った引手



【※2】コウモリの引手



【※3】ウサギの釘隠し



【※4】月の満ち欠けの引手  
左より三日月・居待月・満月



【※5】立ち鶴の引手

オリジナルなものを作るには、ものすごくお金がかかるかと思っていらいっしやるかもしませんが、それは工夫しだいで何とでもできます。

その金物がどんな素材で使われているか、どんな工程で作られているのかを、まずは知っていただきたいです。使われている素材と製作工程の違いを知られば、予算に応じたものを選ぶことができます。

例えば、既成の型を利用して透かしを入れるのだとか、そうすれば材料費はそんなに掛かりませんから、あとはどこまで手間のかかるデザインにするかで値段が決まります。昔ながらの型もいいですが、ご自分で絵を書き、そのデザインで作るのも面白いと思います。1個だけ作るのは大変ですが、数個セットで作ると割に安くできます。

面白いのが、小金が貯まるようにとタンスの取手を黄金虫のデザインで作ったことがあります。巾着袋の形で作ってほしいという依頼もあり、これもお金が貯まるようにと願いを込めたものでした。「幸福を呼ぶ」ということでコウモリ【※2】やウサギ【※3】の形の制作依頼もありました。

また、月の満ち欠けを表現した引手【※4】もあります。思いを込めたデザインでオリジナルなものができますので、こういう世界があることを知っていただきたいです。

## 和文化の逆輸入に希望を託して

住宅では和室が少なくなると同時に襖が無くなり、引手の受注が激減していますので、昔からの手法・技術を活かせる場が少なくなり、それと同時にいいものが無くなってきています。二条城の仕事をここ4、5年やらせてもらっていますが、二条城のような文化財の仕事がある場合はいいのですが、それ以外の仕事の依頼は少なくなってきています。

京都の「和」の文化に憧れて観光に来ている人は多いのですが、自分の家に和の文化を取り入れるのは、なかなか難しいのでしょうか。日本には文化の逆輸入というのがありますから、海外で評価されると日本人が受け入れやすくなるのではと思います、外国の方の依頼にも積極的に対応して制作しています。

外国の方は日本人と発想が違うのか、思えない掛けない依頼があります。立ち鶴の引手【※5】をブローチにしたいとか、本来の仕事ではないのですが、こういった変わった依頼にもお応えしていきます。

和文化・鍔金物の魅力が海外で広がっていくと思います。

## 大学時代の友人関係のつながりから

私は佛教大学出身で、佛教大学は実家がお寺だという友人が多くいます。その友人から袈裟につける環の制作依頼がありました。そのほかに釘隠しや、落慶法要の記念品の制作依頼も受けたことがあります。この人と仕事をしようと思っていた訳ではなく、ただ友人としてお酒を飲んだり話したり遊んだりするのが楽しく、お付き合いをしていただけでした。損得考えずに付き合い合ってきた大学時代の友人関係が、この年になって仕事でつながっていくとは思っていません。お付き合いができて、いい仕事と出会うものだと感じました。

仕事はきちんとやるのは当たり前ですが、友人を裏切らないように頑張らないといけないと思いました。悪い噂はすぐに広がりますから、友人に迷惑を掛けるようなことはできません。

うちは何もかも一人でやっていますが、所詮、一人は一人の力しかありません。そういった人間関係、人とのつながりを大事に、この仕事を続けていきたいと思っています。

撮影品提供／【※1】～【※5】鍔屋(有)松田  
取材協力／(有)西村健一商店  
聞き手・文／広報編集委員会 垣根みき子  
写真撮影／広報編集委員会 沼田俊之



## 畳

### 【畳】

畳は元来、貴族階級のための寝具としてつくられ、その厚さや縁の柄は使用する人の位の高さをあらわしていた。江戸時代中期以降から明治にかけ畳は広く一般に広まってきたが、近年住宅のスタイルの変化と共に急速にその姿を消しつつある。そんな中、有職畳と呼ばれる特殊畳の伝統技術を継承しながらも現代の生活の中で求められる新たな畳のかたちを探求してきた名工にお話を伺う。



いそがき のぼる  
**磯垣 昇さん**  
磯垣タタミ 代表  
昭和25年(1950) 京都府生まれ  
畳技術一級技能士  
2012年 京都府伝統産業優秀技術者 京の名工 受賞

「昨今、建設業界において職人の技術を発揮する場は減少してきており、長年において培われてきた高い技術が失われつつある。そのような現状において、いまこそこの京都で名工を見つけ出したい。」

京都府建築士会

# 磯垣タタミの仕事



八重畳(上)と厚畳(下)



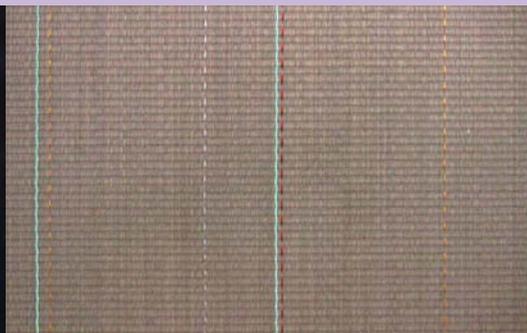
御茵



厚畳、八重畳、龍鬚、御茵を重ねて御神座畳とする



六角鐘敷台

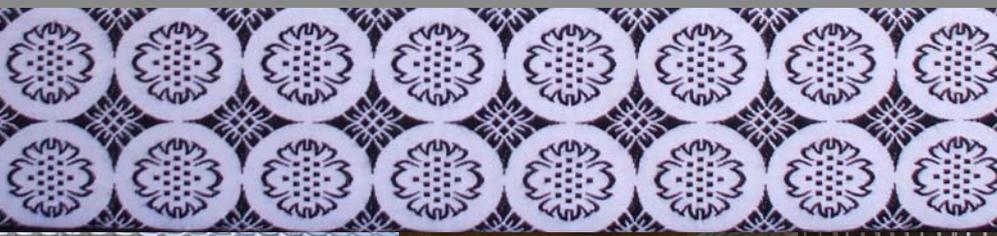


夢虹畳



コルタ畳

畳は所謂和室の床仕上のように一般の生活の中で使用されるものと、社寺仏閣や皇族が儀式の際使用する有職畳と呼ばれる特殊畳に分けられる。磯垣タタミでは、高度な伝統技術が必要とする有職畳の生産、再生に携わる一方、現在消えつつある一般の生活における需要を見つけるべく、炭化コルクを挟み込んだ「コルタ畳」や鮮やかな色の水引や蓄光材を織り込んだ「夢虹畳」の開発を行うなど、伝統技術の継承と畳文化の普及の両側面から畳づくりに取り組んでいる。



## 畳づくりの技術



畳表となるい草



畳表の手織りができるのは全国で数名



手織り畳表織機を作る職人は現在一人となった



畳床に板を縫い付ける



畳床



縁を取り付ける



八重畳は8枚分の柄を合わせる技術が必要



畳をつくるのに使用する道具



## 畳のいいところは？

座っても寝ても心地いいので、座敷にもなるし寝床にもなります。お年寄りが倒れても多少クッションになります。それからマンションに使ったら上下階の防音に有効です。

## 畳の歴史は？

正倉院に聖武天皇が寝台に使っていた畳が残っています。それは藁ではなくて真薦でできています。畳は、はじめ置き畳でしたが、鎌倉期から室町期にかけて書院造が出来上がる過程で畳は部屋に敷き詰められるようになりました。畳は高価で富の象徴

でしたが、江戸期には庶民にも普及してきました。

江戸の町をつくる時に京都から畳の職人集団をたくさん連れて行きました。江戸城や下屋敷に多くの畳の需要があったからですが、その数があまりに莫大だったので江戸では粗いやり方が広まってしまいました。

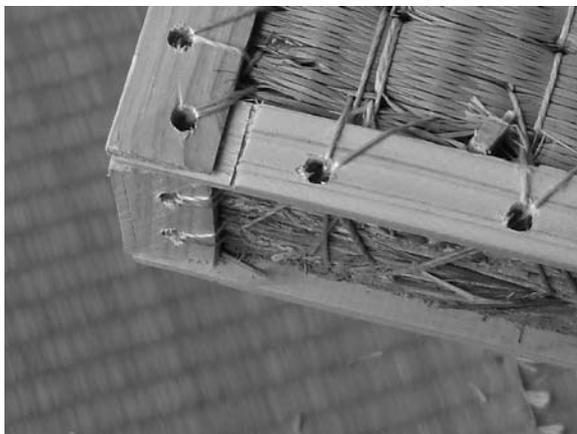
それから関東大震災。住宅の再建に際し大量の畳が必要とされ、手床から畳床の機械化が広まりました。

そして大阪万博時にできた千里ニュータウンで鉄筋コンクリートとスチールサッシでできた気密性の高い建物の中に藁床が入られて畳にカビが生えて沢山の粉ダニが発生して、藁畳から発泡スチロールのつた化学畳に変わりました。

## 京畳とは？

組合（京都畳商工協同組合）に入っていないと京畳という名称を使うことはできません。伝統産物品目として認定されている京畳には角の保持材に発砲スチロールや紙、プラスチックなどではなくヒノキの板が入っています。

京都には技術のある畳屋がたくさんありましたが、しかし昨今、機械化により手縫いの技術が失われつつあります。また組合には現在94軒が加入しているのですが、特に昔からの中心市街での減少が著しく、そのほとんどが右京、西京、伏見など新興住宅地が建つ周辺部に多くあります。市街では呉服屋さんなどがビルに建て替わり、畳がいなくなっています。



畳床の角に板を入れた板入れ畳



畳表を手織りするための織機

## 発泡スチロール畳の問題は？

発泡スチロールと藁では固さが全然違います。藁の方がソフトです。発泡スチロール畳は軽くて扱い易いのですが処分が大変

です。処分時に大量の化学物質が発生してしまいます。京都市では発泡スチロール畳の処分を引き受けていません。藁床だと田畑に放置するだけで肥料になるため重宝されました。

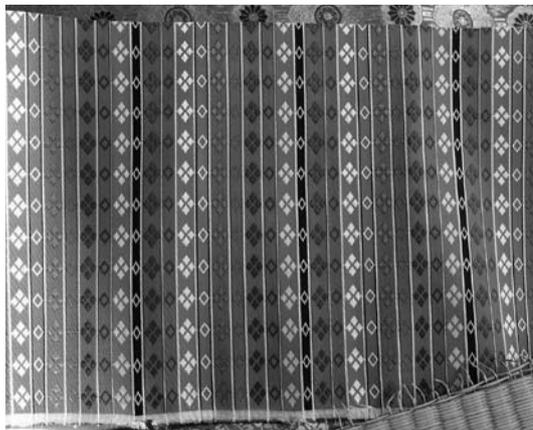
とはいえっても藁床自体がなくなっています。藁床は以前は滋賀や播州（兵庫）から京都へと入れていましたが、今滋賀県で藁床作っているところが1軒、播州の方も1軒。これらがなくなってしまうたら関東、東北からいれないといけなくなっています。米の収穫が機械化したことにより藁が取れなくなりました。藁は輸入もできません。



藁床（左）と発泡スチロール畳（右）

## 畳に関わる職種は？

芯材につかう藁の農家、畳表に使うい草生産農家、それから畳床をつくる畳床屋さん、畳縁の生産者、そして材料を加工して畳に仕上げる畳屋の5つの手を経て畳に仕上がります。



縁は縁で専門の職人が制作する(上は縹綱縁で皇室、神仏用の柄)

## 畳表の現況は？

い草をつくる場所も激減しています。50年前まで日本一の生産地帯であった備前(岡山)と備後(広島)ではもうほとんどなくなっています。生産地が埋め立てられコンピナートになってしまいました。現在約85%が中国からの輸入です。日本が技術指導しました。当初上海近郊で生産されたものを輸入していましたが、これも工業化により埋め立てられ、現在は内陸の四川省が主な生産地です。

四川から揚子江を下って海を渡って日本に届くまでに蒸れてカビが発生してしまい



国内産のい草

ます。そうならないために熱風乾燥させるのですが、高温だとい草の表皮にひびが入り粘りがなくなるので、低温で時間をかけて乾燥させています。  
国内産では約9割が肥後熊本の本八代産です。

## そのようななかでの工夫は？

畜光材を通した畳をつくっています(夢虹畳)。明るいところではバステル調で可愛いアクセントになり、暗いところではそ

こだけが光ります。  
芯に炭化コルクを入れた畳もつくりました(コルタ畳)。コルクに反発力があるため藁床と同じような足裏感覚を味わえ、スタイロみたいにくまないので反発力が維持されます。調湿性があるのでダニの発生が抑制され、木なので最終処分にも困りません。

それから縁が一本しかない畳もつくりました。縁を片方だけ使う一本縁は部屋が広く見えてバランスがとれます。



一本縁の畳

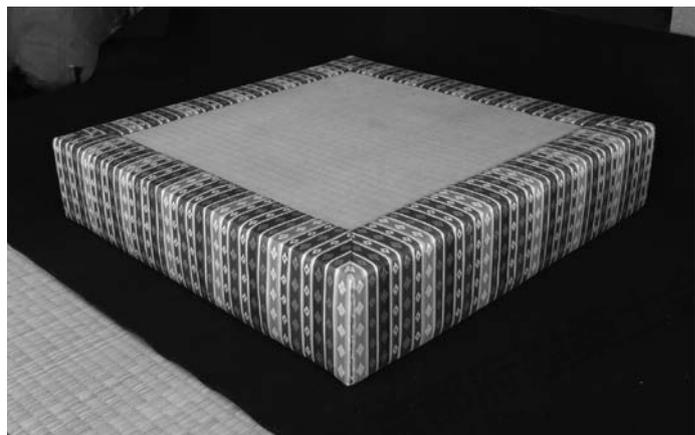
## 磯垣さんのところでは一般的な畳とは別に特殊な畳もつくっている？

有識畳といって主に寺社仏閣で使われるものを扱っています。有識畳を本業で扱っているところは京都市内で3軒ほどです。全国から修理のために京都に帰ってくるものうち、当店では約75%を扱っています。  
つい最近、奈良桜井の三輪大社に長さ七尺三寸高さ五寸の畳と御しとね5枚を納めました。  
今度、文化財畳保存会で取り組む仙台、松島の国宝瑞巖寺の畳は厚さが厚さ9cmあり、領主であった伊達政宗公が下からの檜に刺されないうために厚くしているとか。

## 磯垣畳店は何年前から？

90年前から私で三代目です。私は生まれたときから畳屋になれと言われてきました。私の次男が四代目になります。

若い子が弟子入りしても、機械を使っているところだと技術が身につきません。今では畳の職業訓練校(京都畳技術専門学院)があります。畳屋の子弟のための学校ですが、家が畳屋ではない生徒や海外からの生徒も多くいます。



有職畳

聞き手・文／魚谷繁礼、池井健

## 表具

### 【表具】

表具の歴史は平安時代から始まり、掛軸の表装、経巻、仏画、障子など和紙を取り扱う職人を表具師と呼ぶ。京都は湿度の高い盆地の風土が表具作りに適していたこともあり、表具は文化の発展に伴い発展してきた。しかし、和室の減少とともに表具の生産は少なくなりつつある。伝統工法を守りながら表具を制作する名工にお話を伺う。



まつむらまさとし  
松村匡利さん  
(株)松村泰山堂 代表取締役  
昭和42年(1967)京都市生まれ

「昨今、建設業界において職人の技術を発揮する場が減少し、職人の取り巻く環境は厳しく、職人を諦めていく人もいます。しかし、高い技術を持った職人の存在は絶対必要不可欠である。いまこそこの京都で未来に光を照らす名工を見つけたい。」

# 松村泰山堂の仕事



表具の一つ、襖は吸音性・断熱性・調湿に優れ、部屋の間仕切りとして、優れた機能を備え持つ。種類の異なる和紙を何枚も重ね合わせて作る襖の工程は、表面では分かりえない工夫が施される。落ち着いた柔らかい雰囲気醸し出す襖の奥深さを再認識したい。

## 襖の工程

下地骨

骨縛り

胴張り

手当り

藁掛け（鎧張り）

藁縛り

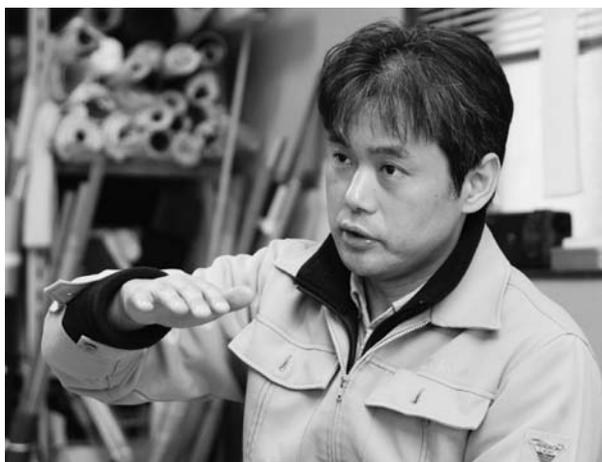
耳削り

下泛掛け（袋張り）

上泛掛け（袋張り）

上張り





## 父の勧めで、京都国立博物館 文化財保存修理所で修行

松村泰山堂は大正末期から続く表具屋です。住宅だけでなく、初代より桂離宮、京都御所、修学院離宮のお仕事をさせていただいております。私で三代目です。

「一回、外で苦労してこい。」と父の勧めで、高校卒業後、京都国立博物館文化財保存修理所で働くことになりました。ここでは、国宝や重要文化財等の美術工芸品、絵画、書籍を扱う仕事など、全国の文化財修理の仕事が集まってきましたから、本当にいいものを見ることが出来ます。

「うちでやっている桂離宮の仕事とは違う方面のことを一から勉強してこい。」と

父に言われて行ったわけですが、家へ帰ってきてから役に立つのかなと半信半疑でした。歴史が好きでその勉強もしたかったので、昼間は京都国立博物館文化財保存修理所で働く一方、夜は立命館大学の夜間で日本史を学びました。畑違いなことをしていましたが、若い時にこのような経験をすることが、今になり役に立っています。そのように勧めてくれた父に感謝しております。

### 修行は10年でも短く、 習得するのは難しい

京都国立博物館文化財保存修理所で修業し始めた最初の頃は、すぐに仕事をさせてもらえる訳ではありませんでした。お客さんが来たからお茶を出したり、のりを炊く仕事ばかりです。親方からは「先輩のやっていることを見とけ！」と教えられました。ただ見ているだけではなく、次、何の作業をするのかを先読みして、次に使う道具を用意して先輩に渡す。細かい気配りができるようにになると、仕事を習得しやすく、早く自分のものになると教えられました。

一般的には10年修行したら一人前になると言われていますが、10年では一通りやっただけで、「よっしゃ、大丈夫や。」というまでには至りません。私も10年では覚えきれませんでした。「年季奉公は10年」と言っていました。今と違って、10年と云うてたら誰も来へんで。」と言われ、最低5年と言っています。それ以上、長く勤めてくれたらいいのですが、時代が変わったことをつくづく感じます。

昔は、地方の表具屋さんから「うちの子に修行させてくれ。」と預かることが多かったのですが、景気が悪いですから、そういうことはすっかり少なくなりました。今、地方の表具屋は若い子が後を継ごうと思わないらしく、京都へ修行に来る

人は少なくなりました。表具の組合がありますが、新しく入社したら組合に登録します。組合の役員の人に聞いた話によると、昨年は一人も登録者がいなかったそうです。表具屋の業界も大変厳しいです。



見習いの最初の仕事は美濃紙の端をちぎり、毛羽立たせた状態で紙を継ぐ。表面が滑らかに継げるようになるまでは、次の仕事をさせてはもらえない。

紙を継ぐ仕事は、表具屋の基本。その一つ、石垣張は継ぎ目の美しさが求められる重要な仕事。

### 父の死の悲しみを乗り越えて

京都国立博物館文化財保存修理所で10年間働いた後、平成10年に松村泰山堂に戻り、しばらく父に教わりながら仕事を手伝っていました。ところが、6年後の平成16年に父が亡くなりました。その頃、京都迎賓館の仕事をお願いされており、父がやっていたことを急遽引き受けなければならず、その時は本当に大変でした。京都迎賓館の仕事は3社で分けて行っており、松村泰山堂が受けた内容のことは父が全て把握していましたから、私は全く内容を知らず、父が図面に残っていたメモを解説しながら、やっ

ていくしかありませんでした。父が亡くなった悲しみを抱えながら、重大な仕事をこなさなければならず、この時が今までの人生の中で一番、辛かったです。社員の支えもあり、無事、京都迎賓館の仕事を終えることができましたが、この時のことは一生忘れられないでしょう。

### 和紙職人の厳しい状況に 危惧する

住宅でも和室が少なくなり、表具の仕事もますます少なくなっています。

まず、床の間が無くなることで、「掛軸」を掛けることが無くなります。昔は季節に応じた掛軸を掛け、季節が変わるごとに掛け変えていました。

掛軸専用の紙の需要が少なくなり、産地によっては、もう一軒しかないというところもあります。一度、廃れてしまうと、再び起こすのが難しいです。独学では伝統技術を身につけるのは途方もなく、どれだけの時間と費用が掛かるか分かりません。やはり、師匠・先輩がやっているのを見ながら覚えないと難しいです。

紙漉き屋は戦後間もない時は沢山いました。副業でやっている方が多く、丹後地方でしたら漁師をしながらとか、農家でしたら冬だけ紙を漉くとかですが、それでも厳しいのが現状です。

### 本質を忘れずに伝統を守る

表具の需要が少なく、「表具のことをアピールせなあかん。」と色々取組みをされている方もおられるようですが、あまりやりすぎて本質から外れてしまうと本末転倒だと思えます。

基本から外れてしまうと何屋さんか分からなくなってしまう。京都でやっているのだから、本質から外れずにやるのが大事だと考えます。地方から見習いで来る若

い子も「京都は本場だから。」と、伝統技術を学ぶために京都を選んで来ます。本当の伝統技術を残していくには、良い仕事をさせてもらわないといけませんし、良い職人も育ちません。良い仕事にできるだけでなく巡り合えるようにと願うばかりです。

## 襖の奥深さ

襖は何枚もの紙を重ね合わせて作りますが、その工程にはそれぞれ意味があり、ご説明したいと思います。

### 1 骨縛り

下地骨に濃糊を付け、楮紙を張ります。楮紙は楮の樹皮繊維を原料とし、丈夫な紙です。下地骨を補強し、反りやムクリを防止します。



下地骨に濃糊を付ける



湿らせた楮紙を張る

### 2 胴張り

胴張りとは下地骨が表面から透けないようにするための工程です。胴張りに使う間似合紙には泥が入っており、防虫効果があり、燃えにくい性質も持ち合わせています。昔、間似合紙が無かった時代は表面から透けないように墨を塗っていました。



間似合紙の全面に濃糊を塗る



間似合紙を張る

### 3 手当たり

襖の4辺の手がかかる場所に細く切った紙を濃糊で張ります。

### 4 養掛(鑑張り)

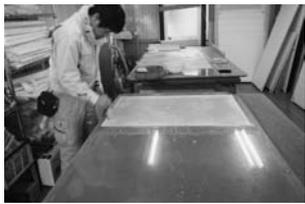
框と壁面に濃糊を付け、薄手の美濃紙をずらしながら3〜5重で張っていきます。裏のように何層にも重ねて張ることで、下地骨と上張りの緩衝の働きをします。五重は5分の1ずつ下にずらして張るので「五遍養」と呼びます。



五遍養の場合、天地から5分の1ずつずらして張る

### 5 養縛り

強靱な美濃紙の全面に薄糊を塗り、撫刷毛で押えながら張ります。養掛(鑑張り)を固定させるために張ります。



美濃紙の全面に薄糊を塗る



撫刷毛で押さえながら張る

### 6 耳削り

框の部分に張られた紙を出刃包丁で削り、框の表面の高さを揃えます。耳削りが終わった時点で現場へ持って行き、建て合わせを行います。



框の部分の紙を出刃包丁で削る

### 7 泛掛(袋張り)

上張り紙が下地に直接付くのを防ぎ、上張りを張った時にピンとした張りを出すためと、ふっくらとした仕上げにするための工程です。

薄手の美濃紙を用い、周囲にだけ細く糊を付けて2重(下泛・上泛)に張り付けます。下泛は縦目に張り、上泛は喰裂紙を横目に張り交差させます。喰裂紙は上張りに継ぎ目を響かせません。



下泛：紙を縦目に張る



上泛：喰裂紙を横目に張る

### 8 泛縛り(清張り)

上張り紙が薄い紙の場合、浮縛り(清張り)を行うことがあります。紙全体に薄糊を塗り、襖全体に張ります。上張りの下地補強の役目をします。

### 9 上張り

12枚張りもしくは1枚で上張り紙を張ります。上張り紙の周囲(縦框・上下框)が取付く箇所)には濃糊を塗り、その他は薄糊を塗ります。撫刷毛で張り、薄い養生紙の上から手で押えていきます。



上張り紙を撫刷毛で張る



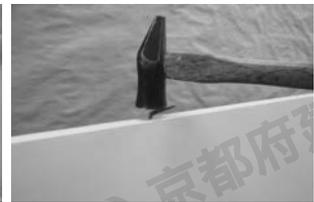
養生紙の上から押える

### 10 椽打

上張りの木口が乾いた後、椽を打ちます。木口に軽く濃糊を付け、椽のすき間から光が漏れないようにイガラを載せます。椽に折合釘を打ち、椽を叩いて、折合釘に嵌るように打ち込みます。



1. イガラを載せるミゾを付ける



2. 折合釘を打つ



3. 木口に濃糊を付ける



4. イガラを載せる



5. 椽を取り付ける



6. 折合釘に嵌るように打ち込む

襖は、その薄さからは分かりえない機能を持っています。襖の奥深さは表面からは分かりませんが、このような工程を経て、作られることを知っていただきたいです。

聞き手・文／広報編集委員会 垣根みき子

白屋八幡神社 本殿 (奈良県橿原市)  
2008年4月 彩色復原工事 竣工

# 京都の名工

## 彩色

### 【彩色】

木造建築の美観を増し、素材を保護するために顔料で塗装する彩色は、赤、緑、青、白、黒、黄などの色を使い調和の取れた美しい色調を造り上げる。先人が作り出した貴重な文化財の保護・修理および新たな制作活動をし、国内にとどまらず世界の文化財にも活動の域を広げている名工にお話しを伺う。

# 八

白屋八幡神社 本殿改修前



使用材料は自ら試験して  
経年変化を確認する。



おのむちはやと  
小野村勇人さん  
(有)彩色設計 代表取締役  
昭和36年(1961)兵庫県生まれ

「昨今、建設業界において職人の技術を発揮する場が減少し、職人の取り巻く環境は厳しく、職人を諦めていく人もいます。しかし、高い技術を持った職人の存在は絶対必要不可欠である。いまこそこの京都で未来に光を照らす名工を見つけたい。」



**調査・記録(現地調査・トレース・光学調査・成分分析)**

現存する彩色のトレースを行い、図柄や配色を記録します。光学調査では塗装の無い部分の風食痕跡から図案を読み取ったり、以前に描かれていた絵画を調査します。同時に化学分析による塗料の特定なども行います。



**図面作成(調査図・草稿図・見取図)**

調査によって得られた図案の断片を元に、図案を描き起こします。また顔料の痕跡や過去の彩色の分類などから配色を決定し、復元の見取図を作成します。



彩色復原工事は仏画や絵画の歴史研究(素材・技法)に基づく調査を入念に行い、図柄、塗料の痕跡から配色や材料を推測し、復元を行っていく。彩色設計では独自の調査保存技術「彩色塗膜採取法(特許取得済)」を開発した。調査における資料・記録物品として図柄や配色を維持したまま残すことができ、次世代へ先人の技術を伝えることができる。

**下地調整作業(塗装掻き落とし・髹水引き・木部修理・胡粉塗り)**

現存の塗装を除去した後に、髹水(どろさ=膠液に明礬を加えたもの)を塗布して木地を固めます。彩色に影響がある損傷や欠損を修復し、胡粉を全体に塗ります。



**彩色作業(転写・下塗り・金箔貼り)**

復元した図案を部材に転写します。その後下塗りや金箔貼りをを行います。金箔を貼る部分は置上げという技法で立体的な塗装を行い、より立体的に文様を見せます。



**使用材料(膠・顔料)**

古来と同じ材料と技法で復元を行うために各種の天然材料を使用します。また下地の状態や気温や湿度に合わせてそれらの配合を都度微調整します。



**仕上げ塗り**

最終的な仕上げを行います。各色をさらに塗り重ね、細かな仕上げ文様を描き、岩掛け(緑青などの岩絵具の塗布)、墨括り(紋様や絵画の輪郭線を線取りすること)を行います。





部へ勤め、後2年間ほど独立して他の織物業の衰退とともに続けていくことが困難になりました。思えば卒業後、作家活動よりも職人として絵を描くことを望んでいました。しかし、図案家として続けられないと思いはじめた時、知人の紹介で文化財の修復をしている、さわの道玄さんにお世話になり、図案家だった能力を生かし建築彩色へと転身していききました。

### 修行時代を経て、独立

建造物文化財修復という括りはとても幅がひろく、建築業のコンテンツでは「塗装業」に位置付けられます。彩色のみならず、漆塗り、金箔押し、丹塗り、金具等、装飾全般に彩色保存修理となる剥落止め等々、勉強しなければならぬことが多くありました。漆塗りや金箔押し等は、少なくともありますが、徒弟制度が残っており、師匠や先輩が居る世界なので修得する方法もありました。

お世話になった会社には残念ながら彩色部門の師匠が居ませんでした。他の会社(同業者)の下請けや手伝いに呼ばれた際に指導を頂き、書籍・資料での勉強を行って来ました。もともと図案家という職人としての下地があったのでとても受け入れやすかったですと思います。

建造物文化財修復というジャンルは先ほども申しました通りとても幅が広く、どうしても内容が希薄になりがちです。ですから、得意な「彩色」にしほりこみたかったことと、業務内容にも責任を持ちたいという思いで「設計」と言う、仕様の説明(確認)や必要な期間(納期)を施工側からも提案するべきだと思いついて「彩色設計」を立ち上げました。

### 寺院建築を華やかにする彩色

仕事を行う先は社寺仏閣が多いのですが、まずは日本の古建築の素晴らしさに感動します。私は建築の専門では無いのですが、木造建築の造り方、組み方、フォルムが何とも言えません。瓦や壁、石組み、庭等々それに加えて周辺の環境も伴って素晴らしい空間です。

その中の一部ではありますが、寺院の莊厳を守る役目として仕事をさせて頂いている事はとても誉なことだと思えます。中でも彩色は、一番華やかな部分だと思えます。それだけ目を引き、非日常的な空間を演出するとても大切な仕事だと思っています。

### ものづくりに大切な「こだわり」

ものづくりに対して「こだわり」を持ち、自身のモチベーションを高め、維持し、楽しくすることを大切にしています。

仕事としての文化財修復も「こだわり」を大切にはしていますが、年齢を重ねていきますと、キャリアを積むと共に「素直な解釈」も、ものづくりにはとても大切だと考えるようになりました。

「こだわり」を持つにも当然、基礎が大切です。数多くの場数を踏むと共に経験と実績が増えるのですが反対に反省も増えます。まだまだ勉強しなければならぬ事も多く気付かされます。ましてや、この文化財修復という生業をやっていると、先人の仕事から教わる事が多く、気が付けば付くほど、かなわない技に思い知らされ、自身のこだわりなどは呼べない果てしない距離や間が出てきて、埋めることのできない空しさに手がつけれなくなり、この克服こそがものづくりに対して一番大切なことかもしれません。

### ものづくりの喜び

やはり施主の方に喜んでいただいた時や、国の宝を正しく修理できた時ですね。修理の際は専門修理委員会にて尊敬する先生方やすぐく思慮の深い職人の方々と共に作業を進め、問題点を一つ一つ乗り越え、正しい修理ができた時が一番うれしい瞬間です。

また、この積み重ねが信頼を生んで次のステージへ進めた時も嬉しかったです。おかげさまで、今ではモンゴルで仕事をさせてもらっています。

### 京都から世界へ「モンゴル」の仕事

2009年夏に東京文化財研究所の方からワークショップの依頼があり、日本の建築彩色の指導を行うため、モンゴルへ行きました。それがきっかけで「モンゴル文化遺産センター」の方とその後交流することになりました。

モンゴルはチベット仏教寺院が多く、最初はその塗装に関して指導・提案をしていたのですが、2012年、3回目の渡蒙の際、「墳墓壁画がありそれを剥がしウランバートルの博物館へ展示したい」という要望を聞きました。日本での高松塚古墳やキトラ古墳の事を思慮しながら伺ったのですが、7.5メートル前後の白虎・青竜をはじめ人物像・建物・動物などが数多く描かれ、石碑に刻まれた時代(552~582年)というとても古く貴重な文化遺産に出会いました。それを剥ぎ取る依頼でしたが、即答でそのような計画は考え直した方が良く提案させて頂きました。後の資料(ユネスコのレポート等)やモンゴル遺産

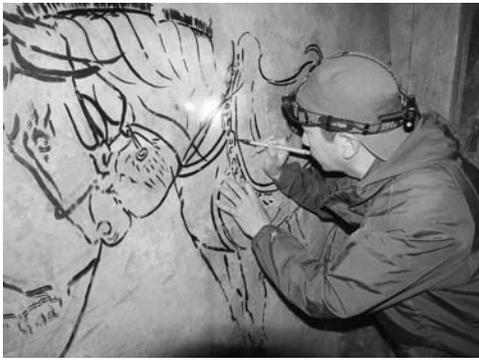
### 図案家から建築彩色へ

もともと絵を描くことは小さいころから好きでした。しかし美術部に入ったりはせず、ひたすら運動部(サッカー部)の方へ進んでいました。小学校・中学・高校とサッカー部一筋でした。大学への進学の際、スポーツ推薦でその方面へ行こうとも考えたのですが、高校時代にお世話になった先生が日本画をされていて、何かと美術の方面へ導かれ、最終的には先生の勧めで京都嵐山にある嵯峨芸術大学(当時は嵯峨美術短期大学)の日本画を学ぶ方面へ行きました。その時の先生の名前が「今尾景三」先生で大家「今尾景年」のお孫さんにあたる方です。

大学時代に日本画を教えて頂いた先生が、林司馬・箱崎睦昌・林潤一・下保昭・堀泰明・土手朋英、錚々たる先生でした。もつと在学中に学んでおけばよかったと思いつながら、卒業後、西陣の帯の図案を描く仕事につき、ひたすら先人の作品群を参考に意匠(デザイン)を起こすといった作業をしていました。約10年間その意匠

センターでの処置を伺い、墳墓を開けた後の保存状況によるカビ問題や色彩の損傷に  
対し私達でできることは、一刻も早く調査  
記録を取る事だと説明しました。保存方法  
や活用についてはモンゴル国のまとまった  
考えも当然必要ですが、世界の宝なので慎  
重かつ的確な保存方法にしなければなら  
ないと思います。

そして、私たちができる墳墓壁画の調査  
に対して、今描かれている壁画の模写を行  
い復原図を起こす事、またその際に顔料分  
析を行い、使用材料や用いられた道具の特  
定を行うという計画を説明し、許可の出た  
部分から試験施工を行いました。後に模写  
は2014年8月に行いました。今は日常  
業務の合間を見ながら私の母校、嵯峨芸術  
大学にも協力してもらい、体育館を借りて  
巨大壁画の調査確認や清書を行っていま  
す。このような、世界の貴重な宝に触れ後  
世に伝えるために尽力できることは重責で  
職人冥利に尽きますし、人生にとって最大  
の喜びです。



モンゴル墳墓壁画にて模写をする



嵯峨芸術大学の体育館での清書



談山神社権殿チャン塗り



善光寺山門のチャン塗り



奈良大極殿正殿 復原工事

## 印象深かった彩色復原の仕事

モンゴルプロジェクトも大変印象に残っ  
ているのですが、独立したての2004年、  
奈良・大極殿正殿彩色復原も日本画家で有  
名な上村淳之先生の監修の基、天井画を8  
000枚・支輪板300枚というとてもつも  
ない物量の彩色を行った事も印象深い  
です。

また、\*チャン塗りという途絶えた技法の  
復原を2007年長野県善光寺山門で行っ  
た事、2010年〜2011年奈良県の談  
山神社・権殿で行った事です。2012年  
の築地本願寺の堂内彩色修理で保存と復原  
を合わせた新工法を適用したことも印象に  
残っています。また、2013年には沖繩・  
首里城の向拝柱の桐油彩色の復原も思い出  
深いです。

## 美術・工芸文化の 中心地「京都」

京都はもとも日本の中心でもあり美  
術・工芸文化の盛んであった場所ですから、  
当然それら足跡は数多く残されています。  
伝統建築や伝統工芸が多いという事は職人  
の数も多く、その中でしのぎを削って来た  
わけですから、高い技術の職人も多く居ま  
した。

また、職人を支えるための道具屋、材料  
屋はもちろん、問屋・お客様（寺院）も多  
く居ましたので、京都は他府県よりは仕事  
に掛かる時間や費用に対して理解がありま  
す。

その反面、美術・工芸に対して厳しい目  
を持って言う怖さもあります。間違  
った事や解釈を行うとたちまち悪評が立  
ち、経営が立ち行かなくなる所を感じます。  
しかし何と言っても、京都は伝統産業を行  
うに当たり、材料の調達や仕事や職人の情  
報を得るにはこれほど恵まれた土地はない  
と思います。

## 文化財修復事業に伴う 仕事の現状

現在は文化財修復といえは補助金事業で  
しか行わなくなってきたと思います。補助  
金事業の場合、公の指導のもと、修復とい  
う仕事を行うのですが、机上からの指示に

対して、机上への報告が重く、実施工より  
も書類作りに追われ現場とのバランスが難  
しくなっています。

職人が手仕事を離れ書類作りや管理部門  
に回され、さらに効率化がすすめられ、こ  
数年で多くの中堅から若い職人が減少し  
たように思います。急ぎの仕事や仕事が重  
なった際、助っ人をお願いする職人が激減  
しています。

何よりも伝統技法を必要とする場が少な  
くなってきたと思います。職人を育てるに  
は一にも二にも現場の数をこなすことと言  
っても過言では無いのですが、作業を行う  
物件がとにかく少ないです。キャリアに応  
じた仕事の場を我々先輩の職人が作って行  
かなければならないのですが、現代社会に  
必要性が少なくなってきた状況では、  
我々も変化していかなければならないのか  
もしれません。

文化財修理の「こだわり」の中には「同  
材料・同技法で行う」という指標がありま  
す。ただそれにとらわれて身動きが取れな  
くなることがありました。時代の流れと共に  
法律で規制されたり、消滅してしまっ  
た材料もあります。踏襲できるものでは  
限りこだわり、足りないところは記録で残  
し、作業一辺倒ではなく、学習したことや  
調査・確認をしたところの調書を添えるこ  
とで確かな修理・復原の技術（方法）を後  
世に伝える役目と変わっていくのかもしれ  
ません。

※チャン塗り／油・密陀僧（乾性油）と松脂・  
薫陸・乳香・蕃椒を合わせたものをのりとし、  
顔料を溶いたものを塗布すること。

聞き手・文／

広報編集委員会 中田 哲・垣根みき子

# 京都の名工

# 九



## 【あかり】

人々の生活にとって欠かすことができないあかり。江戸時代には灯心に油を浸したのものや、蠟燭を和紙で覆った行灯や提灯などのあかりが発達し、意匠に凝ったあかりが作られるようになり、その技術も伝統として今に残る。自然素材を用いる伝統技術を受け継ぐ名工・段下一郎さんと、その作品・技術を世間に伝えようと奔走されている三浦太輔さんにお話しを伺う。



だんしたいちろう  
段下一郎さん

昭和13年(1938)兵庫県生まれ



みうらたけすけ  
三浦太輔さん

三浦照明(株)代表取締役  
昭和45年(1970)京都府生まれ

昨今、建設業界において職人の技術を發揮する場が減少し、職人の取り巻く環境は厳しく、職人を諦めていく人もいます。しかし、高い技術を持った職人の存在は絶対必要不可欠である。いまこそこの京都で未来に光を照らす名工を見つけたい。

京都府建築

# 三浦照明の仕事

～手づくりのあかり～

木 <もく>

国産の杉は年を経るごとに艶やかな飴色に変化し、えもいわれぬ風情を醸し出す。棧(さん)の細いすっきりとしたデザインを持ち味とし、それだけに加工の技術が問われる。



建築空間においてあかりが人の心に与える影響が大きい。三浦照明では月のあかりをお手本に自然の素材を用い、木、竹、金物などの各々の分野に特化した熟練の職人が一つ一つ丹誠込めて手作業で製作する。素材を生かした繊細な和のあかりは柔らかな陰影をもたらし、空間に美しい趣を加える。

竹 <たけ>

竹には白竹・黒竹・寅竹・煤竹・ゴマ竹などがあり、用途に合わせて竹を選ぶ。編んだり、枠部分は「ささら」による曲げ加工を行い、皮の美しさと繊細さを際立たせる。



金物 <かなもの>

真鍮製の露地行燈・壁掛け行燈は、真鍮板に専用の刃物で溝を入れることから始まりますが、でき上がった時に折り目が美しい直角が出せるようになるまで、数年はかかるといわれる。





## 三浦照明の歴史

私の曾祖父が大二郎と言いまして、滋賀の出身ですが、明治23年（1890）に琵琶湖疎水が完成し、翌年に日本で初めての営業用電力発電所が蹴上にできたこともあり京都に電気工事の需要があったようで、曾祖父が、その電気工事の仕事をするために京都へ出てきたのがはじまりです。

祖父も同じように電気工事を主体としてやっておりましたが、本来性に合わなかったのか、いつのまにやら電気工事の仕事から店頭で電気製品を販売するのにならわり、自分でも電気製品を作っていたようです。祖母は西陣から嫁いで来ましたので、敷布を織る事ができまして、その中にニクロム線を通し今言うホットカーペットのような物を作ったり、配給のパンを美味しく食

べる為にトースターのような物を作ったりしていたようです。その中で照明器具も作っていたようですが、電気製品も手作りから工業製品へと時代は変わっていきまして、時代の流れと共に地域性（花街があり飲食店もたくさんある）もあつたのか、和のあかり（照明器具）を専門に自分たちの手で作って販売するようになりました。祖父自身も和風に興味のある人でしたので、時代は洋風の華やかな時でしたが、和のあかりにこだわったのでは、と思っています。

祖父は真鍮で照明器具を作ることが得意でしたが、真鍮だけですと照明の種類も限られてきますから、竹や木の照明も作ることにしまして、それぞれの職人さんと共に照明器具の製作をして参りました。しかし、当初和風照明だけで商いをするのは大変だったようです。

父は卒業後サラリーマンをやっておりましたが、それなりの年齢になった時に家業を手伝えと言われまして、厳しい状況の家業を継ぐのは嫌だったようですが、長男で男一人だったこともあり、周りから説得されて帰ってきました。父が家業をやり始めてから段々と仕事として確立できるようにになりました。今もやっていることですが、お施主様や設計の方から「こんなできないか」とデザインの依頼を受け、それを職人さんと一緒に考え、製作して現場へ納める。ということをお父の頃から引き継いでやっております。

私の話になりますが、私は大学では外国語学部を卒業し、卒業後はサラリーマンをしていました。家業のことは住まいが店の近くではなかったため、あまり身近に感じておりませんでした。「照明器具を売って商売をしているんや」という程度でした。戻ってきたのも母に「長男やし、やらなアカンえ」と言われたのがきっかけですが、いま思うと「いつかはせんと」と思っていたのかもしれない。戻ってきてても何の知

識もなかったもので、電気の話は「勉強しておかなアカン」と思い、仕事をしながら夜間の電気の専門学校へ行きました。

父と仕事を一緒にすることとなり、父を社会人として見た時、今までは全く違う感情が生まれてきました。「立派な人なんや」と。また、家業の手伝いをするようになって初めて、仕事の繊細さと美しさに感動しました。この行燈には電気の線が通っているのですが、電線が見えると不細工ですので、棧の中に線を通してどこに通っているのか分からないようにしています。このような職人さんの技術を通じて照明器具を製作し、お客様に喜んで頂ければこれに勝る喜びはございません。



この照明の電気の線は下から棧の中に通し火袋を灯す。

## 木の仕事

和風照明の中で特に多いのは木の照明器具です。主に国産杉を使いますが、なかでも特に柾目の細かい秋田杉を使うことが多く、美しい柾目を見せることに気を使っています。柾目を際立たせるために「うづくり」という作業を行います。

いかに華奢で繊細で軽さを表現できる

か、常に職人さんと考えながら製作していますが、限界はあります。その物の意匠や大きさにもよりますが、棧の見付は大抵8ミリ前後で製作します。もっと細くすることもできませんが、そうすると壊れやすくなり寿命が短くなります。障子と同じように汚れてきたら紙を貼り替えますので、何回も貼り替えるのに耐えうる棧の寸法で製作しないと、壊れてしまいます。長いこと使って頂いて経年変化を楽しんで頂き、愛着を持って頂ければ嬉しいです。



棧の内側がV字にカットされているのは紙を貼り易くするためであり、紙の接着面積を増やすため。長持ちする工夫がされている。

## 「心にともるあかり」を作り続けたい

家業を継ぐために帰って来たばかりの頃は、指物の伝統技術や美しい仕事の仕上がりになど、物のでき上がりが一番大事なことであったと思います。それはもちろん当たり前前のことで大事なことですけれども、それよりも、お使いになるお客様がどう感じて頂けるのかが一番大切なことではないかと気がつきました。技術が一番ではなく、お使いになるお客様の気持ち。例えば、六畳の部屋に夜帰ってきて灯りをつけた時に、心が癒されホッとすると、そんな「心にともるあかり」を目指して作りつづけたと思います。



## この道に進んだきっかけ

生まれは兵庫県の湯村温泉の近くで、中学校を卒業してすぐに大阪へ出てきました。たまたま就職したところが照明器具を作っているところでした。会社の社長の奥さんが私と同じ郷里でして、仕事しながら学校へ行かせてもらえるというので、就職しました。ところが仕事が忙しく学校どころではなくなり、そのまま仕事していきましたら照明器具を専門とする職人になり、今に至ります。

最初に就職した会社では電気のない時代から灯明や行燈を作っていました。木枠の照明器具の製作では歴史がありましたので、伝統技術を学ぶことができました。当時は、白木ではなく漆塗りの枠の照明が多かったです。古いやり方でやっていたので、

今から比べると五分の一しか製作できませんでした。

一人でやるようになったのは27歳です。10年ぐらい修行して独立しました。

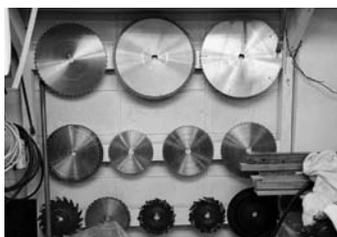
## 材料の目利きと 道具の手入れが大事

照明に使う木は、よく吟味をしないといけない照明が作れません。材料の目利きが必要です。製材の段階から上手く木取りをしないといい照明が作れません。生きた木を探すがなかなか難しいです。生きていない木というのは、油っ気もなく曲りませんから。

それから、製材した木から細い枠を取るために刃が薄い鋸を使わなければいけないのですが、刃が薄いだけに目立てをしないと残りの厚さが少なくなり、5回ぐらい目立てをすれば使えなくなり、新しいのを調達しなければなりません。道具の手入れには手間がかかります。

また、榫目を際立たせるために「うづくり」を行います。かる萱の根を紐で円筒状に強く巻き束ねた棒を使い、木材の表面を何度もこすり柔らかい部分を磨きながら削ぎ落としますと、硬い年輪の部分が浮き上がり木目に凹凸ができます。これは光沢が出ますし埃もつきにくくなります。

いいものを作るには道具の手入れと調達が大事なのですが、道具を買うにも置いているお店が少なくなり苦労します。



「うづくり」を終えた木枠



「うづくり」に使う道具



榫目を際立たせるための「うづくり」作業



木枠は湯につけて荒曲げし、乾燥させた後、型に嵌めて丸みを出す。

## 意匠と機能の折合いの難しさ

最近、斬新なデザインの照明をされる設計士さんの依頼があり、図面を頂いたのですが、図面ではよく分からず、実際作ってみないと分からないということで、模型の段階で何回も作り直して納まりを検討しました。

紙は薄いけれどもその厚さも勘定しないといけないですし、電気の線をどこに通すか、電球を取り換えられるように考えなくてはいけませんし、電気が点灯しなければ照明ではないので、斬新なデザインほど、どうやって機能を満たすかが難しいです。しかし、設計士さんが工場まで足を運んで来られ、顔を向き合わせて打ち合わせをさせてもらったので、無事納めることができました。

設計士さんのデザインの意向を知り、機能を持たせた照明を作ることは難しいですが、今思えば興味深い仕事となりました。

聞き手・文／広報編集委員会 垣根みき子



優美な曲線の細い木枠にピンと貼られた和紙が美しい。



木を自在に曲げる技術は優美な曲線を生み出す。